

教員養成セミナー 11月号
動画講義

13ヵ月完成
教職・一般教養
トレーニングブック

◆第3回◆教育原理

学習指導要領・新学習指導要領

カリキュラム、キャリア教育

講師：大西 圭介

テーマ1

学習指導要領

テーマ1

学習指導要領とは

学習指導要領とは、全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするための教育課程の**基準**のこと。
学習指導要領には、教科等の目標や大まかな教育内容が**告示**として定められており、**学校教育法施行規則**では、年間の**標準授業時数等**が定められている。学習指導要領や年間の標準授業時間数を踏まえて、カリキュラムを編成することが**各学校**に求められている。

テーマ1

学習指導要領と告示

告示とは、公の機関が決定した事柄を広く一般国民に知らせること。原則として**法規としての性格は有しない**が、学習指導要領は例外で、法令を補完する法規としての性格を有している。したがって、学習指導要領は、**法的拘束力**を有している。

学習指導要領の法的根拠

学校教育法第33条

学校教育法施行規則第52条(小学校)※他校種も規定あり。

テーマ1

学習指導要領の沿革

学習指導要領は、1947(昭和22)年に初めて発行された。
戦前は、「教授要目」「教授細目」によって教科内容、指導方法等が定められていた。
学習指導要領は、アメリカの「コース・オブ・スタディ」を範として作成され、以後、約10年ごとに全面改訂されている。

テーマ1

学習指導要領の変遷①

改訂年	特徴	背景等
1947 (昭和22)年	<ul style="list-style-type: none">最初の学習指導要領。法的拘束力はなく、試案という位置づけ。戦前の教科であった「修身(公民)」「日本歴史」「地理」を廃止。「社会科」「家庭科」「自由研究」の新設。	戦後すぐ急ピッチで作成された学習指導要領。アメリカの「コース・オブ・スタディ」を範として作成された。デューイの経験主義的な特徴を持つ。廃止された教科は、戦争に導いたとされるもので、精神的な面を支えた「修身」、天皇家の神話性を高めようとする歴史観、侵略した中国や韓国などを国土に含めていた地理を廃しようというもの。戦前男女は別の教育を受けていたが、「家庭科」は男女共修のために創設。
1951 (昭和26)年	<ul style="list-style-type: none">前学習指導要領と同様に試案という位置付け。「自由研究」を発展的に解消し、小学校は「教科以外の活動」に、中学校・高等学校は「特別教育活動」に。	急ピッチで作成された前回の学習指導要領を修正したもの。教科間のつながりなどを考慮しての改訂。
1958・60 (昭和33・35)年	<ul style="list-style-type: none">教育課程の基準として「告示」されるようになり、法的拘束力が明確化された。系統的な学習を重視。基礎学力の充実を図るために国語、算数の内容の再検討と授業時数の増加。科学技術教育の向上を図るための算数、理科の充実。「道徳の時間」の特設。	経験主義的な教育によって、学力が低下・偏向しているとの批判があり、系統主義的な学習を重視するように。法的拘束力をもたせたこと、道徳の時間を特設したことで、戦前の教育の復活だという批判もあった。

学習指導要領の変遷②

改訂年	特徴	背景
1968・69・70 (昭和43・44・45)年	<ul style="list-style-type: none"> ・「教育内容の現代化」を図った。 ・理数系科目を中心に科学の発展に対応した教育を重視。 ・教育内容・授業時数がともに増加し、量的にピークを迎える。 	<p>高度経済成長により、戦後の復興のみならず、経済大国としての発展を経験してきたため、現状に合う教育内容が求められた。理数系科目を中心に科学の発展に対応しようとしたのは、経済発展だけではなく、スパートニク・ショックの影響も大きい。</p>
1977・78 (昭和52・53)年	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる「ゆとり重視」（ゆとりのある充実した学校生活を送れるようにすること）への転換。 ・ゆとりを実現するために、学習指導要領を大綱化させる。 ・教科内容の精選と授業時数の削減。 ・学校裁量時間(ゆとりの時間)の新設。 	<p>1958年版以降、系統的学習(いわゆる詰め込み教育)を続けた結果、学校教育が知識の伝達に偏るとの批判を受け、知・徳・体の調和の取れた発達を目指した。</p>

学習指導要領の変遷③

改訂年	特徴	背景
<p>1989 (平成元年)年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆとり教育の継承。 ・思考力、判断力、表現力等を育もうとする「新しい学力観」の提示。 ・個性尊重の教育。 ・小学校低学年に「生活科」の新設。 ・高等学校の社会科を、「地理歴史」と「公民科」に再編。 ・「世界史」の必修化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の改訂以降、社会問題化したいじめ・不登校・暴力行為、さらなる経済発展科学技術の進歩、高齢化などを受け、自主的に学ぶこと、個性を尊重することが求められた。 ・入学式、卒業式などでの国旗・国歌の取り扱いを明確化。
<p>1998・1999 (平成10・11)年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・完全学校週5日制の全面実施。 ・「生きる力」を培うことがねらいに ・小学校3年生以上に「総合的な学習の時間」の新設。 ・中学校・高等学校の「特別活動」で「クラブ活動」を廃止。 	<p>これからの時代を生きるために「生きる力」を育むことが目指された。そのために完全学校週5日制が必要であり、教育内容の厳選、授業時数の削減が行われた。基礎基本の習得と、教え込みではない授業方法の採用、特色ある学校づくりが求められた。</p>

学習指導要領の変遷④

改訂年	特徴	背景等
2003 (平成15)年	<ul style="list-style-type: none"> ・学力重視（「確かな学力」）路線に転換。 ・学習指導要領は教える内容の「最低基準」となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆとり教育による学力低下の批判から一部改正を実施。 ・PISAショック。
2008・2009 (平成20・21)年	<ul style="list-style-type: none"> ・「生きる力」という理念の継承 ・基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視 ・小学校高学年における「外国語活動」の新設 ・「総合的な学習の時間」の時間数削減。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆとりか詰め込みかではなくバランスを取ることを大切に。 ・2006年改正の教育基本法を踏まえた改訂。
2015 (平成27)年	<ul style="list-style-type: none"> ・一部改正 ・「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」に変更。 	<p>いじめの社会問題化。 →いじめ防止対策推進法にも関心を持っておくこと。</p>

テーマ2

新学習指導要領

テーマ2

新学習指導要領の改定の背景

新学習指導要領の目指す方向性やこの後の教育時事の内容を理解する上で、社会情勢を知っておきたい。

抑えておきたい事項は3つ。

- ・ **人工知能**の発達→既存の職業がなくなる/新しい職業ができる
- ・ **人口減少、高齢化**→生産年齢人口が少なくなる
- ・ **グローバル化**→競争相手が日本国内ではなくなる。

これらをまとめて、「変化の激しい時代」などと言われる。
教育は、これらを見据えて子ども達を育てていかななくてはならない。

「社会に開かれた教育課程」～3つの視点～

2016年12月中教審答申
第1部－第4章1.

- ①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、**教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。**
- ②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、**自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。**
- ③教育課程の実施に当たって、**地域の人的・物的資源**を活用したり、放課後や土曜日等を活用した**社会教育との連携**を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

テーマ2

カリキュラム・マネジメント ～3つの側面～

2016年12月中教審答申
第1部－第4章2.

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた**教科等横断的な視点**で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、**教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立**すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な**人的・物的資源**等を、**地域等の外部の資源**も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

「主体的・対話的で深い学び」

中教審答申
第1部－第7章2.

① 「主体的な学び」

学ぶことに興味や関心を持ち、**自己のキャリア形成**の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。

② 「対話的な学び」

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。

③ 「深い学び」

習得・活用・探究という**学びの過程**の中で、各教科等の特質に応じた「**見方・考え方**」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

テーマ2

「主体的・対話的で深い学び」の実現

中教審答申
第1部－第7章2.

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことでも、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。

テーマ2

「主体的・対話的で深い学び」の実現

中教審答申
第1部－第7章2.

「主体的・対話的で深い学び」は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、**単元や題材のまとまりの中で実現されていくことが求められる。**

育成を目指す資質・能力の「三つの柱」

学びを人生や社会に生かそうとする
「**学びに向かう力・人間性等**」の涵養

(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)

「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を
総合的にとらえて構造化

(何を理解しているか、何ができるか)

生きて働く「**知識・技能**」の習得

(理解していること・できることをどう使うか)

未知の状況にも対応できる
「**思考力・判断力・表現力等**」の育成

テーマ2

新学習指導要領で押さえておきたいポイント

- ・ 前文

教育基本法第1条にある「**人格の完成**」という目的と第2条の5つの目標

- ・ 総則

第1 小学校教育の基本と教育課程の役割

高等学校新学習指導要領

主な変更点

- ・ 理数教育充実のため、数学「数学I」で統計に関する内容を必修化することや、「理数探求基礎」および「理数探求」の新設。
- ・ 地理歴史は「地理総合」「地理探求」「歴史総合」「日本史探求」「世界史探求」の5科目、公民は「公共」「倫理」「政治・経済」の3科目へ改訂。このうち、「地理総合」「歴史総合」「公共」は必修科目。
- ・ 外国語科は、「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を新設

テーマ3

カリキュラム、キャリア教育

カリキュラム②・・・教育課程

教育目標の達成のために意図的に教育内容を組織、配列したもの。
学校教育活動全体の計画。

教育課程 = Curriculum

※語源 = クレーレ (Currere) “走る、競争、競争路”
= ゴール (目標) に向かって走るコース (道のり)

教育内容を子どもの発達段階ごとに整理し、各学校ごとに何をどのようにして学習させるかを決めたもの

テーマ3

カリキュラムの種類

①教科カリキュラム

②経験カリキュラム

③統合的カリキュラム

④潜在的カリキュラム

テーマ3

教科カリキュラム

教科中心の一般的カリキュラム（伝統的なカリキュラム）。
各教科で学ぶ目標を定めて、目標達成のための教科内容・教科方法が設定される。

メリット：教育内容の作成が簡単。効率的。
評価しやすい。

デメリット：学習者の興味関心に基づいていない。
学習が暗記中心、知識偏重主義になりやすい。

テーマ3

経験カリキュラム

学習者の体験を重視し、経験による発達を促す教育内容によって編成されるカリキュラム。

例) 体験学習、実習、創作

メリット： **学習者の興味・関心・欲求**に基づき、教育環境を重視
学習者中心の教育で**学習者のモチベーションが高い**。

デメリット： 明確な内容が示されないため、成果があいまい。
活動を行うだけになったり、**評価や測定が難しい**。
個人の質的な違いをみるのに手間と時間がかかる。

統合的カリキュラム①

教科カリキュラムと経験カリキュラムの中間

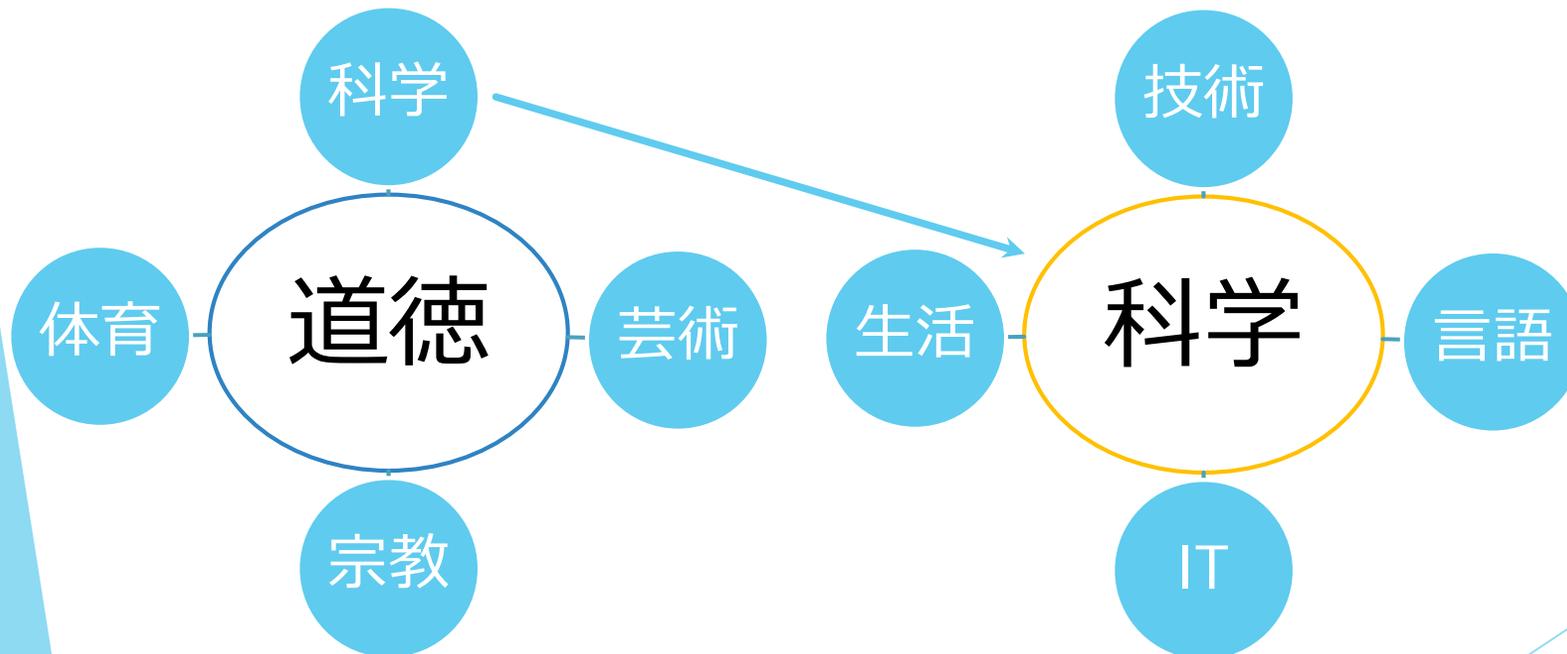
- (1) 相関カリキュラム
教科の区別はそのままに、必要に応じて他の教科の内容を関連づける。
例) 国語「枕草子」の授業に歴史「平安時代」をコラボ
- (2) 融合カリキュラム
異なる教科を共通する特徴で統合して新しい教科にする。
例) 地理 + 歴史 + 公民 = 社会科
- (3) 広領域カリキュラム
教科の枠を取り払い、広い領域から教育内容を編成。
例) 国語科「スイミー」 + 理科「魚の生態」

テーマ3

統合的カリキュラム②

(4) コア・カリキュラム

教えた内容のコア（中核）を設定し、その周辺に関連する様々な教育内容を加えて、全体を総合的に編成したカリキュラム。



- ・ 教育目的の違いがカリキュラムに反映されやすい。
- ・ どのような教育目的を設定するかが重要になる。

テーマ3

潜在的カリキュラム・・・裏のカリキュラム

ベンソン・シュナイダーが主張した裏のカリキュラム
「教師が学習者に対して無意識に伝達し、学習者も無意識に
学んでいるカリキュラム」

※「廊下を走らない」と指導している教員が廊下を走っている姿を見て、「大人はずるい」と思うなど。

テーマ3

キャリア教育

キャリア教育の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、**キャリア発達を促す教育**。

キャリア発達とは？

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を
実現していく過程。

テーマ3

キャリア教育が求められる背景

情報化・グローバル化・少子高齢化・消費社会等

学校から社会への移行をめぐる課題

①社会環境の変化

- ・新規学卒者に対する求人状況の変化
- ・雇用システムの変化

②若者自身の資質等をめぐる課題

- ・勤労観、職業観の未熟さと確立の遅れ
- ・社会人としての基礎的資質・能力の発達の遅れ
- ・社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向

子どもたちの生活・意識の変容

①子供達の成長・発達上の課題

- ・身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向
- ・生活体験や社会体験等の機会の喪失

②高学歴社会における進路の未決定傾向

- ・職業について考えることや、職業の選択、決定を先送りにする傾向の高まり
- ・自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま、進学、就職する者の増加

学校教育に求められている姿

「生きる力」の育成～確かな学力、豊かな人間性、健康・体力～

テーマ3

今後の学校におけるキャリア教育・
職業教育の在り方について(答申)

基礎的・汎用的能力の具体的内容

「人間関係形成・社会形成能力」
「自己理解・自己管理能力」
「課題対応能力」
「キャリアプランニング能力」

テーマ3

今後の学校におけるキャリア教育・ 職業教育の在り方について(答申)

「人間関係形成・社会形成能力」

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協同して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力。

「自己理解・自己管理能力」

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力。

テーマ3

今後の学校におけるキャリア教育・ 職業教育の在り方について(答申)

「課題対応能力」

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力。

「キャリアプランニング能力」

「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力。